

列島西部における石棒の終末

—縄文晩期後半における東西交流の一断面—

中 村 豊

列島西部における石棒の終末

— 縄文晩期後半における東西交流の一断面 —

中村 豊

はじめに

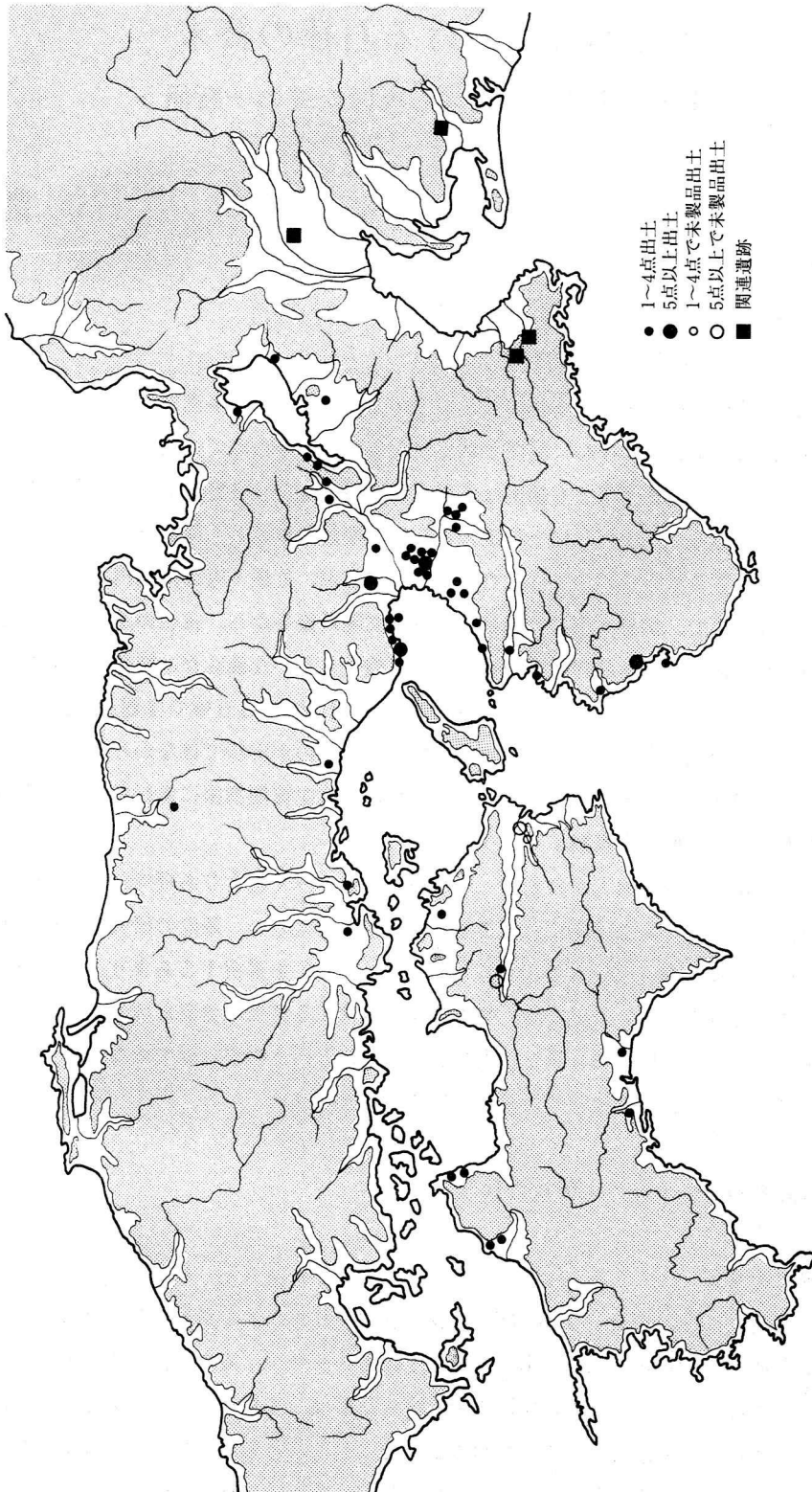
石棒が、縄文時代を代表する呪術具のひとつであることは周知の事実である。したがって、その研究が列島東部（註1）中心に展開されてきたことは、きわめて必然的なりゆきであると考えられる。近年、列島西部でも類例は蓄積されつつあるが、資料数では列島東部の足もとにもおよばないであろう。また、出土状況から石棒の機能を推測し、儀礼を復元することも、なお難しいといわざるをえない。こうした現状ではあるが、近畿・東部瀬戸内地域（註2）すなわち列島西部東半で、突帯文土器の後半である縄文晩期後半から、古相の遠賀川式土器である弥生前期初頭にかけて、結晶片岩製の粗製大型石棒をもちいた儀礼が、特徴的に盛行することが判明しつつある（第1図）。これが、同時代の列島内における石棒では屈指の隆盛を誇るといふ事実は、当該地域でさえ案外知られていないというのが実状ではなかろうか。本稿では、近年、列島西部で関心が高まりつつある、晩期後半から弥生前期初頭に盛行した結晶片岩製石棒に焦点をあて、その展開を概観する。

なお、すでに筆者を含む何人かの先学・同学が上記のテーマをとりあげている（註3）。しかし、現時点ではローカルな研究にとどまるといわざるをえない。筆者の研究も、その後の検証で書き改めねばならない部分もある。さらに、フィールドを重視するあまり、視点の偏った研究に陥ることを危惧している。また、弥生時代に残存する特殊な資料と評価されるため、分布域を越えた視野から、成立の背景を精査できていないというのが実態ではなかろうか。そこで、本誌を通して、汎列島の視野での検証を仰ぎたいと思う。

1. 列島西部における石棒研究の現状

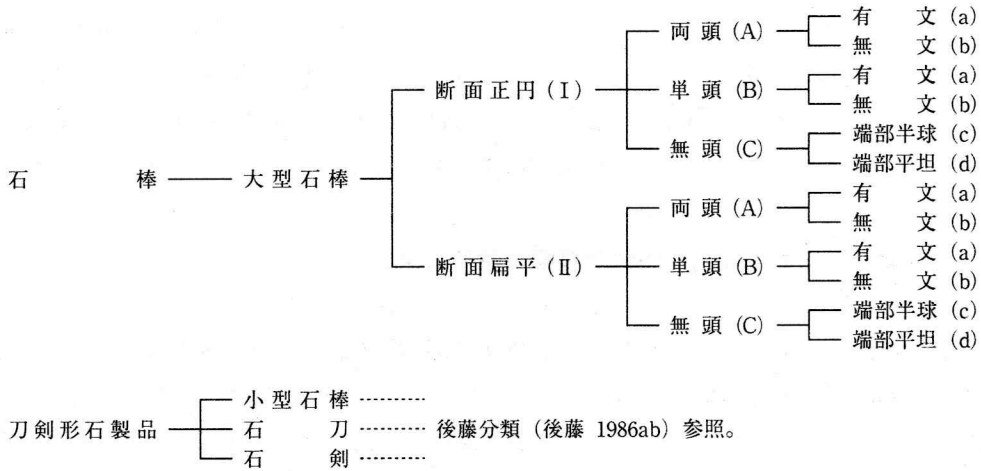
(1) 問題点の整理

石棒を含む呪術具の研究が、しばしば、遺物の個別実証的以上の意味を持ちえない傾向のあることはいなめない。しかし、こと本稿で取り上げるテーマが、縄文時代の終末という、列島に展開した歴史における、屈指の転換期に相当することは、まぎれもない事実である。すでに、大陸系の文物やその情報が続々と流入しつつあったことは多言を要しまい。それではなぜ、この時期に、列島東部を中心に多用されてきた縄文時代の典型的な呪術具のひとつである石棒が、



第1図 列島西部における晩期後半石棒の分布図

第1表 分類案



縄文時代史において、必ずしも、精神文化の先端を担ってきたとはいえない列島西部東半において、盛行したのであろうか。その背景をさぐることは、必然的に、縄文時代の終末という問題を解明するのに寄与しうると考えられるのである。そこで、まずこの地域の石棒と、これと深い関連性を持つ刀剣形石製品（註4）の展開を略述したい。なお、これに先だって、第1表に分類案を示しておく。

(2) 列島西部における石棒・刀剣形石製品の展開

列島西部に石棒が出現するのは、縄文中期末から後期初頭にかけてである。この時期に、さまざまな文物が列島東部より流入することは先学の研究によって定着しつつある（泉 1985、渡辺 1975 など）。北白川C式土器の成立や隅丸方形住居、石囲炉、切目石錘などとともに大型石棒も流入したと考えられる。当初は、ほぼ石棒のみがもちいられ。後期前葉までは続く。この流れは、おおむね列島西部東半までおよんだ。その後、後期中葉には刀剣形石製品が流入するが、これは、後期後葉から晩期前半にかけて、列島西部西半、すなわち九州地域にいたるまで波及する。後期後葉から晩期前半までは、むしろ刀剣形石製品が主流をしめ、石棒は後期後葉に一旦盛行する様相をみせるが、晩期前半にはふるわない。晩期後半の突帯文土器成立にさいして、一度、石棒・刀剣形石製品ともにほとんどみられなくなる（註5）。

かつては、これを最期に列島西部の石棒は姿を消し、やがて縄文時代の終末へとむかうと考えられた。しかし、ここ20年ほどの資料蓄積によって、晩期後半ごろ、列島西部東半において石棒が三たび、多くみられるようになることが判明してきた。これは、おもに大阪市長原遺跡（田中・家根・山中ほか 1982、松尾・森・山中ほか 1983）と兵庫県伊丹市口酒井遺跡（浅岡・泉・野口ほか 2000、南・大下ほか 1988）の資料などによって、泉拓良（泉 1985）や大下明（大下 1988）らによって指摘されたものである。

その後、神戸市大開遺跡（前田佳・内藤ほか 1993）と徳島市三谷遺跡（勝浦ほか 1997）での石棒発掘はあらたな展開をもたらせた。それは、大開遺跡が遠賀川式土器を主体とする環

濠集落で、弥生前期初頭まで石棒の残存することが確認されたことである（第4図）。さらに、この時期の石棒の素材ほぼすべてが結晶片岩でしめられるため、産出地である三谷遺跡の発掘は大きな意味をもつ（第3図）。これによって、石棒研究が縄文時代の終末を考える上であらたな視点を提供しえる可能性が、丹治康明（丹治 2000）や筆者（中村豊 1998・2000）らによってみいだされたのである。この流れが、近年の活況につながっていると考えられよう。

2. 晩期後半における列島西部石棒盛行時期の検討

本稿の研究が、単なる個別研究ではなく、縄文時代の終末との関わりを視野に入れる以上、時期決定は非常に重要な前提作業である。ここでは、上記の石棒が隆盛する時期を確認しておきたい。すでに、この石棒が、おおむね晩期後半から弥生前期初頭に分布することは判明している。既存の土器編年でいうと、近畿地域でいう長原式ということになる。徳島市名東遺跡（勝浦 1990）や三谷遺跡が、おおむねこれに併行することは、2条突帯深鉢の盛行、いわゆる波状口縁方形浅鉢が退化していることから肯定できる（第3図）。これより古い1条突帯深鉢の滋賀里IV式、2条突帯深鉢の出現と、いわゆる波状口縁方形浅鉢や逆「く」の字型口縁浅鉢が特徴的な船橋式の遺跡から出土することは少ない。むしろ問題は、三谷遺跡で、突帯文土器に遠賀川式土器が伴うことから、いつまで残るのかということであろう。

まず、三谷遺跡出土の土器（第3図）と、大開遺跡出土の土器（第4図）とを比較すると、両者には多々共通点が認められる。たとえば、大開遺跡からは、少量の突帯文土器後半に属する土器が出土する。一方、三谷遺跡出土の遠賀川式土器古相の土器と、大開遺跡の土器とを比較すると、これもほぼ同様な特徴を見出すことができる。すなわち、両遺跡には時間的な接点があったと考えられよう。その後、弥生前期中葉、後葉の土器は、突帯文土器の手法を遠賀川式土器へ写していくという方向性があり、両者を作り分けることはなくなっていったと考えられる。それにともなって、確実な共伴例もほとんど確認できなくなる。

加えて、石棒を生産していた三谷遺跡に後続すると考えられる弥生前期中葉の遺跡において、石棒が製作されている事実は確認できない。また、石棒の搬出先と考えられる遺跡でも、弥生前期中葉からはじまる遺跡で出土することは、ほとんどない。以上から、現時点では、列島西部東半で最期に石棒が盛行するのは、長原式を前後とする期間に絞って大過あるまい。そうしてこれは、突帯文土器が消滅していくという土器の動向と密接に関わり合うと考えてよいだろう（註6）。

ちなみに、これらを列島東部の土器型式に対比すると、おおむね、東海地域の馬見塚式に併行すると考えられる。さらには北陸地域の下野式、中部地域の氷I式、関東地域の千網式に併行するとみてよいであろう。すなわち、おおむね東北地域の大洞A式およびそれに併行する諸型式に対応することになる。実際、長原遺跡や口酒井遺跡、大開遺跡、三谷遺跡などにおいて、氷I式が出土していることもその傍証になろう（註7）。

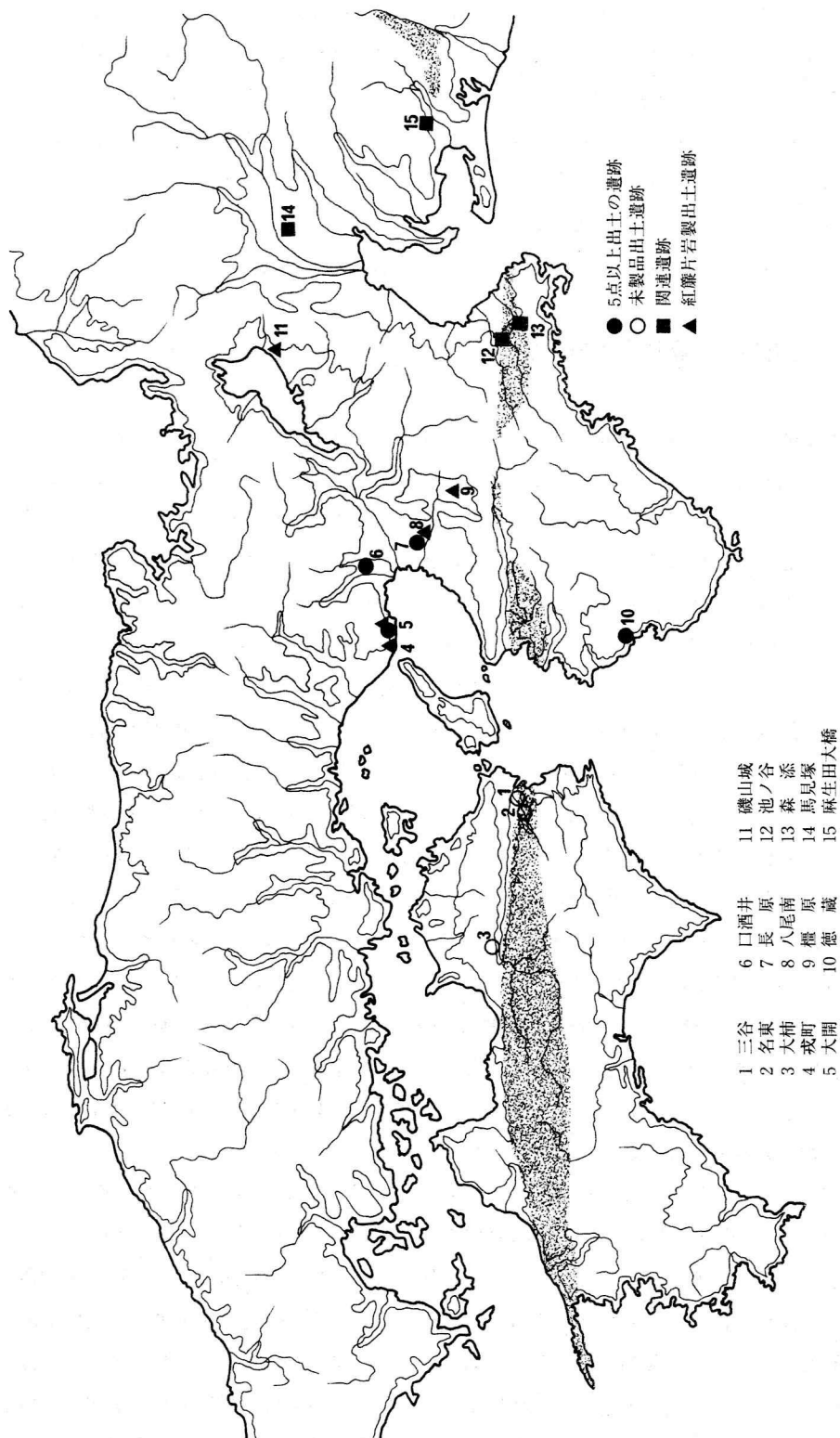
列島西部の晩期における列島東部系土器の搬入状況をみると、晩期前半の土器との共伴例は、おおむね大洞B式から大洞C₁式までに限られる。それ以後、突帯文土器前半の類例はあまり多くはなく、大洞C₂式の流入は非常に少ない傾向にある。かつてはこれをもって列島西部が弥生文化をむかえたと考える向きもあった(坪井 1962)。しかし現状を鑑みると、突帯文土器後半期に氷I式や大洞A式が流入し、再び東西交流が活発化した様子を想定しておくのが穏当であると思う(註8)。ここから、前節でみた、刀剣形石製品が衰退し、結晶片岩製の石棒が盛行する動向との共通性をうかがうことができる。

3. 三波川帯と結晶片岩の重要性

前節で指摘したように、列島西部の晩期末に盛行する石棒の大半が結晶片岩製である。この事実は、生産遺跡と消費遺跡との関連をとらえやすいという利点を示している。しかし、結晶片岩は三波川帯の広域変成岩であるから、生産地を点でとらえることはできないという意見もあろう。そこで、列島西部の石棒・刀剣形石製品の石材を追いかけてみることにする。

中期末から後期前葉の石棒は、砂岩製や凝灰岩製、結晶片岩製と複数の石材をもちいている。後期中葉から晩期前葉の刀剣形石製品は、これも粘板岩や頁岩、結晶片岩といったいくつかの石材をもちいていることがわかる。しかしそれが、晩期後半には、ほぼ結晶片岩に統一される。すなわち、比較的広域に流通すると考えられる石棒や刀剣形石製品も、複数の石材を利用しており、結晶片岩という単一の石材をもちいるのは、すくなくとも列島西部の石棒流通史においては特筆すべきといえよう。また、結晶片岩を産出する三波川帯は、列島西部では中央のやや南よりを東西に走るという特徴をもっている(第2図)。分布図(第1図)との対比をこころみると、おおむねこれと一致する傾向をもっているといえよう。また、石棒としては非常に稀少で特徴的な、紅簾片岩製の分布図を合成してみた(第2図)。これらは神戸市戎町遺跡(口野・井尻 1993)、同大開遺跡、大阪府八尾市八尾南遺跡(米田ほか 1981)、奈良県橿原市橿原遺跡(末永ほか 1961)、滋賀県米原市磯山城遺跡(中井・中川ほか 1986)から出土している。紅簾片岩製石棒の分布もまた、三波川帯からの石棒流通範囲を示している。以上から、すくなくともこの時期の結晶片岩製石棒が、三波川帯との関連なしに、なんの秩序もなく製作されていたというのでは、現状を正確に説明できるとは思えない。

それでもなお、三波川帯の三谷遺跡で18点以上にとどまる石棒が、そこから離れた長原遺跡で22点、口酒井遺跡で16点、大開遺跡で12点と匹敵する点数出土することから反論があるかもしれない。しかしこれも、出土点数中端部のしめる数や完存品のしめる数、平均残長、平均重量を比較し、調査面積を加味すると、第2表のごとく三谷遺跡が圧倒的に優位であることは動かない。これに未製品の出土遺跡をあわせると(第1図・第2図・第5図)、三谷遺跡、名東遺跡、徳島県三好町大柿遺跡(栗林ほか 2001)と、いずれも徳島地域の遺跡から出土していることがわかる。むしろ、和歌山県みなべ町徳蔵遺跡出土の石棒が、5点とも端部を有し



第2図 三波川帯（アミ目）と石棒出土遺跡との関連性

第2表 石棒出土遺跡ごとの比較

	調査面積 (約㎡)	出土点数	端部数	完存品数	未製品数	平均残長	平均重量 (g)
徳島・三谷	2,700	18+	17	3	2	27.4	1663.8
徳島・名東	2,000	4	3	2	1	27.4	1402.3
徳島・大柿	53,012	6	5	0	1	21.4	1057.4
兵庫・大開	3,670	12	1	0	0	14.5	425.9
兵庫・口酒井	-	16	1	0	0	9.0	393.3
大阪・長原	18,700	22	5	0	0	11.7	-
和歌山・徳蔵	14,500	5	5	0	0	25.5	-

ていることが特徴的である (註9)。

以上の検討から、晩期末の列島西部で出土する石棒の大半が、三波川帯のいくつかの核となる遺跡で製作され、一定の秩序をもって流通していたことがわかる。さらに、三波川帯が列島を東西に走るという地質学的所見は、無秩序な石棒生産の証拠と考えるよりも、当時の東西交流を探る上で、より重要な視点を提供すると考えるべきであろう。この点は、とくに次節でとりあげようと思う。

4. 晩期後半における列島東西交流の一断面

晩期後半に盛行する結晶片岩製石棒の分布状況を確認すると、三谷遺跡をはじめ、三波川帯のいくつかの遺跡が核となって、大阪湾沿岸から淀川水系、紀伊水道沿岸などを中心に分布していることを確認できる (第1図)。この分布状況を見ると、一見他地域とは無関係に、いわば、晩期後半という特殊な事情のもとに石棒儀礼が隆盛したかのようにみえる。しかし、四国四県地域出土の石棒をみると、全60点中41点(68%)までを徳島地域出土品がしめるという事実がある。列島西部でも列島東部から離れるほど石棒出土例は減少するのである。さらに、石棒が常に列島東部を中心に展開していることや、晩期後半に列島東部系の土器が流入していることをあわせると、やはり列島東部との関連を視野におくべきであろう。その場合、まず確認しておかねばならないのは、すぐ東に隣接する東海地域の事例である。

東海地域における、同時代のおもな石棒出土遺跡をみると、三重県度会町森添遺跡 (奥・御村 1988)、同勢和村池ノ谷遺跡 (奥 1995・99・2001)、愛知県一宮市馬見塚遺跡 (澄田・大参・岩野 1970)、同豊川市麻生田大橋遺跡 (前田清・小島隆ほか 1993、安井・石黒ほか 1991)などをあげることができる (第1図・第2図・第5図)。森添遺跡や池ノ谷遺跡では未製品が出土しており、馬見塚遺跡や麻生田大橋遺跡では墓域の近辺から出土している (註10)。とくに、出土状況・時期が明確な資料は、麻生田大橋遺跡豊川市調査区土器棺墓SZ22出土例である (前田清・小島隆ほか 1993)。時期は馬見塚式である。断面形態からは石剣というべきであるが、やや粗いつくりの結晶片岩製という点では列島西部東半のものと同通している。相対的に列島西部東半のものに比べて、頭部を有する型式が多いことや、断面径がいく分細かいことなど、細部には相違点がみとめられる。しかし、大局的には結晶片岩製の粗製品が主体をなすという点において共通しており、むしろ相違点は、地域性と評価しておくのが穏当である

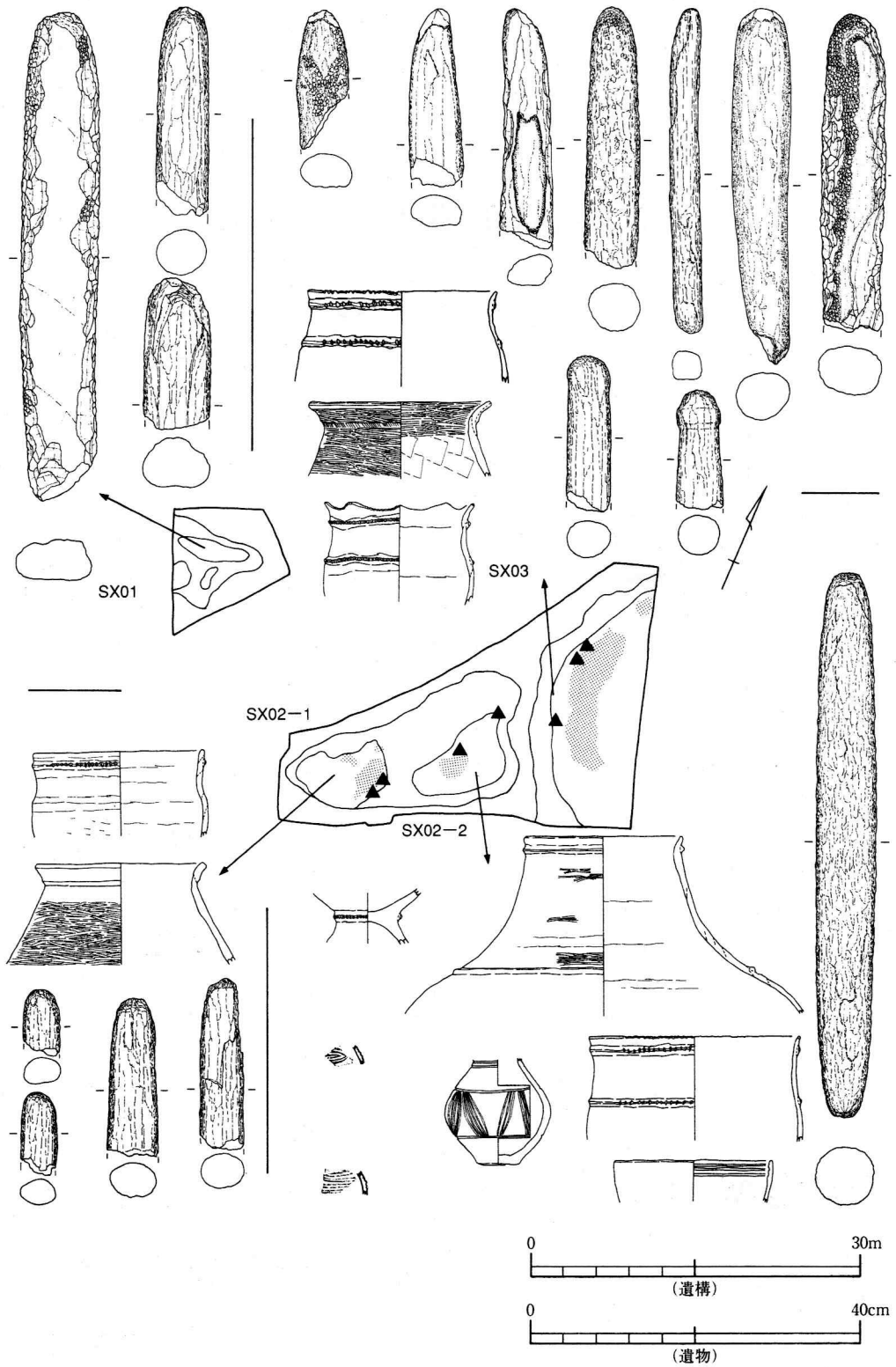
う。すなわち、列島西部の石棒再隆盛の背景には、東海地域との密接なかかわりを認めることができるのである。また、石材に結晶片岩を多用するという点も、両地域は共通している（註11）。以上から、晩期後半の列島西部東半における石棒が、結晶片岩製にこだわりをみせるのは、三波川帯近辺の、核となる遺跡で集中的に生産されたという理由だけではなく、背景には中央構造線を通した東海地域との文化交流をかいまみることができるのである。そうして、そこから天竜川をさかのぼった、長野県辰野町樋口五反田遺跡配石址（桐原ほか 1972）や、さらには山梨県北杜市金生遺跡第2号配石遺構（新津ほか 1989）など、中部地域の遺跡を見据えることができるのではあるまいか。

樋口五反田遺跡配石址や金生遺跡第2号配石遺構は、氷I式の所産とみてよいであろう。つまり、長原遺跡、口酒井遺跡、大開遺跡や三谷遺跡などの本稿で検討した遺跡とのあいだはおおむね併行関係にあるとみられるのである。上記東海地域の諸遺跡もまた、同時期に比定できよう。

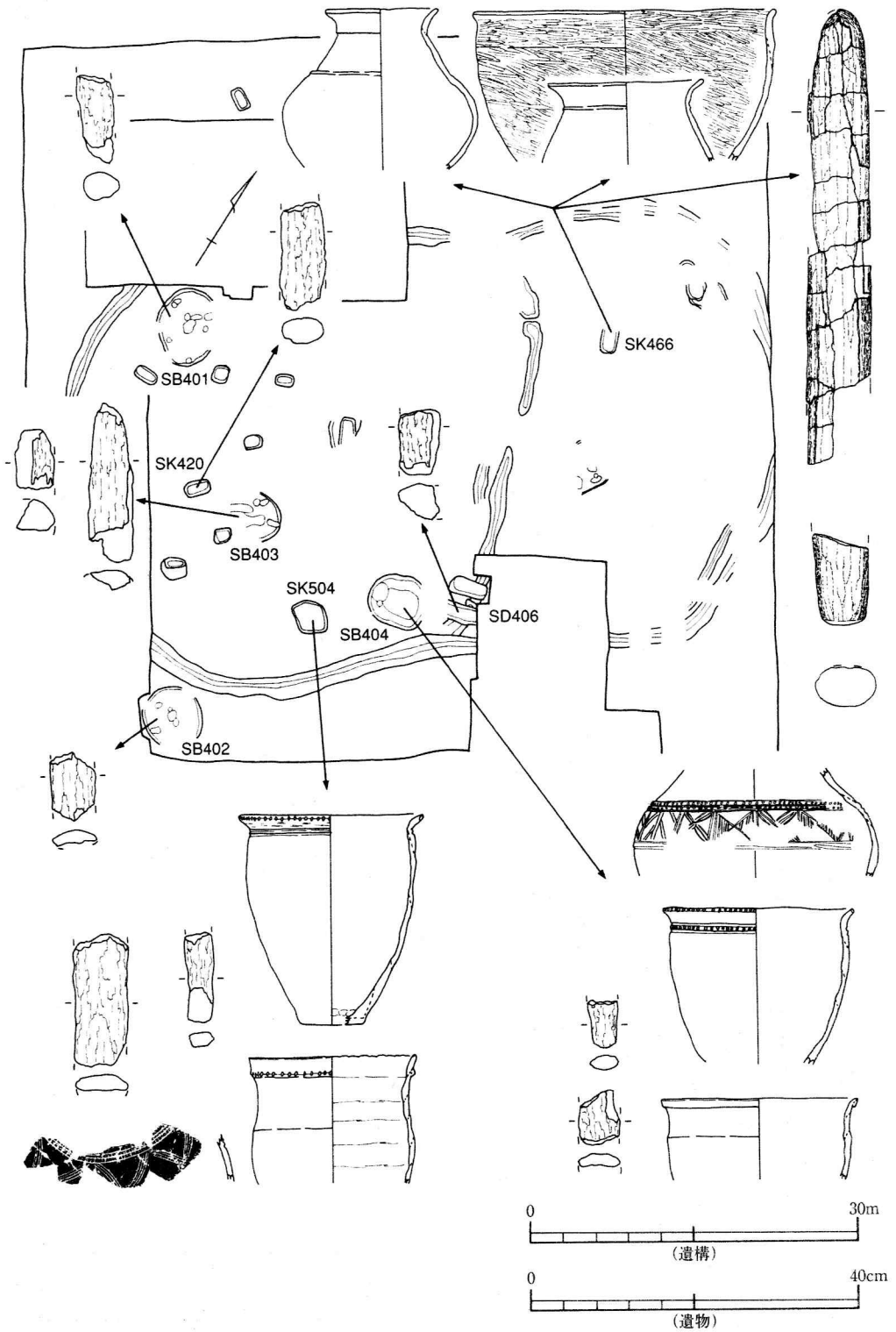
その三谷遺跡では、自然凹地から多量の貝・獣骨類などとともに7体にもおよぶイヌの埋葬がみつまっている（第3図）。そして、結晶片岩製の石棒はここから集中的に出土しているのである。三谷遺跡は一見、金生遺跡や樋口五反田遺跡の配石遺構とはなんら関わりを持たないかのようにみえる。また、金生遺跡第2号配石遺構の石棒は、結晶片岩製ではない。しかし、石棒や動物骨が出土する点に重きを置いた場合、双方の共通性を想起することができる。むしろ相違点は、交流の過程で生じた、各地域の特徴であると考えられる。結晶片岩は、中央構造線沿いの交流の過程で、多用されるようになっていったものであろう。そうすると、晩期後半の列島西部東半における石棒儀礼再隆盛の背景には、中央構造線（三波川帯）を幹とし、列島西部東半、東海地域から中部地域にいたる、東西双方向の交流網を想定することが可能であるといえよう。

5. 終末期の石棒をどうとらえるか

石棒が縄文時代の典型的な呪術具であるということは、日本史の教科書や概説書にも掲載されるほど普及している。また、環濠集落が弥生時代の典型的な集落形態であるという認識も、揺るぎのないものである。ところが、本稿ですでにのべたように、神戸市大開遺跡は、環濠集落でありながら、12点の石棒が出土しているのである（第4図）。大開遺跡は、石棒を製作する三谷遺跡と併行関係にあると考えられる。また、地理的にも石棒分布域の中に位置しており、これを混入と考えることはできない。すなわち、弥生時代の典型である環濠集落で、縄文時代の典型的な呪術具である石棒がもちいられていたと考えざるをえないのである（註12）。大開遺跡は石棒の分布する地域の環濠集落でも最古に位置づけることができるから、移行期にしばしばみられる、石棒の残存という特殊性としてとらえることも確かに可能である。しかしながら、前節で検討したように、大開遺跡とはほぼ同時代の三谷遺跡は、晩期後半の中央構造線を通



第3図 三谷遺跡の様相 (アミ目は貝層、▲はイヌの埋葬)



第4図 大開遺跡の様相

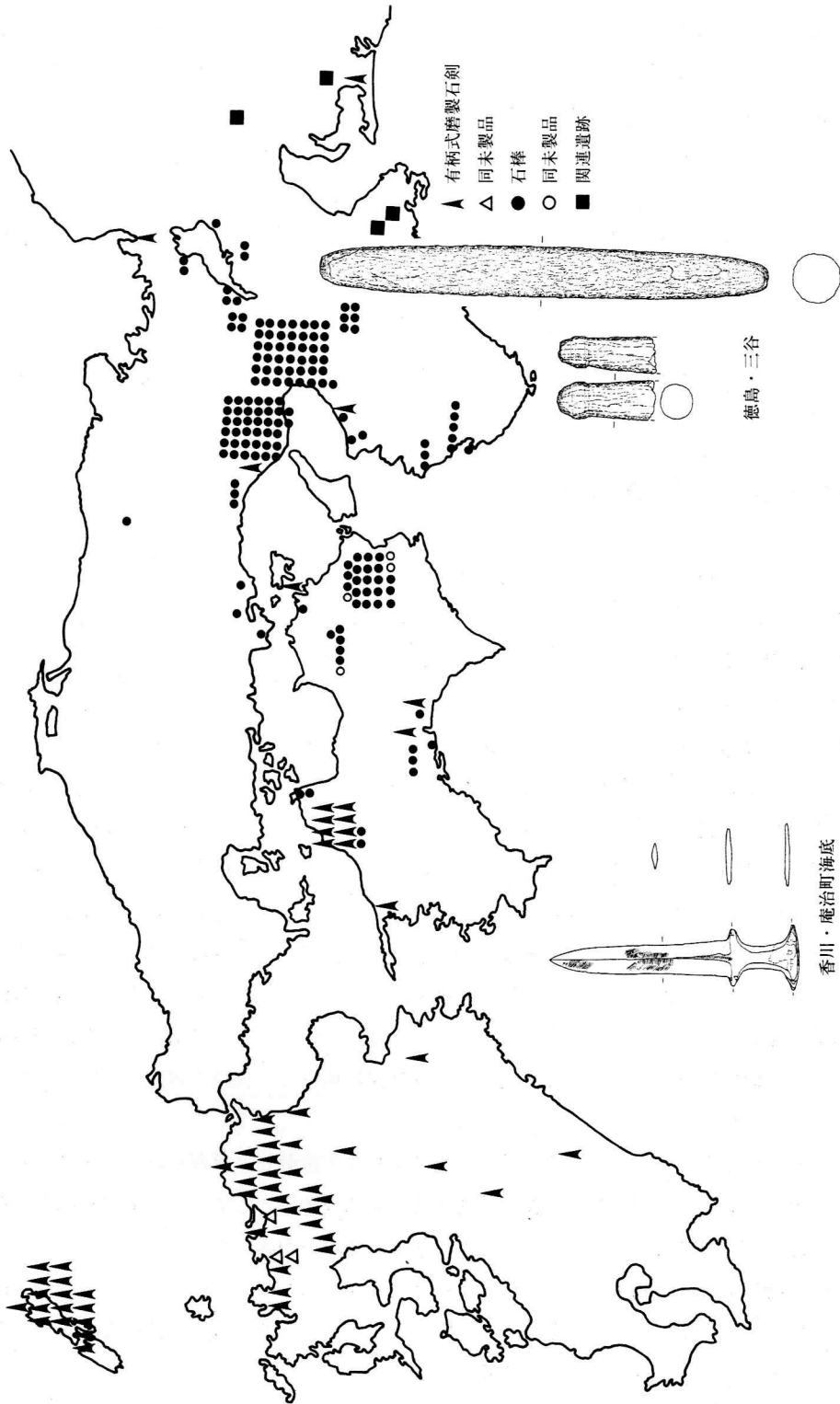
した東西双方向交流の一翼を担っていたと考えられる。そうすると大開遺跡も、その三谷遺跡を一つの核とする、結晶片岩製石棒によって結びついた地域圏を構成していたことになる。大開遺跡を単独で評価する限り、それはどうみても環濠をもつ弥生集落である。しかし、大開遺跡を三谷遺跡や長原遺跡、口酒井遺跡など、晩期後半の典型と評価しえる諸集落と有機的に結びついていると考えた場合、それを、単に特殊なもの、伝統的要素としてかたづけることはできないのではあるまいか。しかし、逆に大開遺跡の持つ大陸系の要素を軽視してもまた、正しい結論に導くことはできないだろう。ここでいえることは、列島西部東半の縄文時代の終末は、従来考えられていたよりも、非常に複雑に入り組んだ文物の交流を視野において説明しなくてはならない、ということである。そのためには、はじめから縄文系、弥生系ないしは大陸系という限界を設けずに、また、列島東部や列島西部西半いずれにも偏らずに、同時代の列島を俯瞰すべきであると思う。

6. 列島西部西半との関わりを探る

前節までは、晩期後半の列島西部東半における石棒流入の背景を探るため、おもに、列島東部との関わりを論じてきた。ここで、偏りをさけるために、少し視点をかえて、列島西部西半はどのような状況にあったのか、呪術具を中心に概観しておきたい。

当時の列島西部西半は、相当大陸系の文物が流入していた。そのなかで、石棒に対応できる呪術具のひとつとして、有柄式磨製石剣をあげることができる。時期は、おおむね夜臼式単純期から板付Ⅱa式にかけてであろう(武末 1982)。また、高知県南国市田村遺跡で、ほぼ同じころと考えられる遺構から、石棒と有柄式磨製石剣がそれぞれ出土している(前田光・小島恵・吉成ほか 2004) ことなどから、両者は、ほぼ同時代に展開していたと考えられるのである。従来、大陸系の文物と、縄文系の文物の分布を同一図面上にあらわすという試みがなされることは、ほとんどなかったのではあるまいか。しばしば作成される分布図には、明確に線引きがなされているものもある。しかし、こと、縄文時代の終末という問題に取り組む場合には、図上に線引きをおこなっているのは、実態を正しく伝えることはできないであろう。なかば隘路に陥りつつある研究を打開するには、特定の地域や学説に偏らない視点を導入し、図上にも表現すべきであると思う(註13)。

第5図に両者の分布を示した。中四国地域の西部あたりで接触し、東西それぞれに分布の中心を持つことを確認できる。突帯土器・遠賀川式土器の分布圏として一括してしまいがちな列島西部であるが、呪術具を重視すれば、東西で大きな地域差があったことがわかる。言い換えれば、縄文晩期後半の列島西部東半は、大陸系文化を導入しつつも、列島東部との交流を、容易に手放すことはなかったといえる。そうして、第5図のような地域色を持ちながら、あらたなる時代へと足を踏み入れていくのである。



第5図 石棒と有柄式磨製石剣 (遺物1/8)

ま と め

縄文晩期後半の列島西部は、同時代の列島でもっとも石棒儀礼が盛行した地域のひとつである。こうした状況は、縄文時代の終末という特殊性を示していると考えられる。本稿では、なかば行き詰まりにあったこの見方を、列島東部を視野におくことによって打開しようとしたものである。その結果、中央構造線をひとつの核とした東西双方向の文化交流があったことを推察した。列島西部に氷Ⅰ式や大洞Ⅰ式が流入する背景も、決して特殊なものではなく、この交流によって説明できるのではあるまいか。これは、その他の文物にも派生する問題であって、石棒のみで語り尽くせるものではない。それでも、単なる個別研究にとどまらず、縄文時代の終末という問題に、少しは寄与できたと考えている。

神戸市大開遺跡など、初期の環濠集落においても石棒が出土していることは、残存という表現がとられることが多い。しかし、同時代の列島でもっとも盛行している地域の資料に対して、残存というのでは、事態を正しく伝えることにはならないと思う。土器の併行関係を詳細に検討する限り、これは残存というよりも、むしろ東西双方向の文化交流網の渦中に、大開遺跡なども、とどまっていたことを示していると考えられる。そして、縄文時代の典型的な文物である、石棒によって結びついた交流網のなかで機能している以上、たとえ大陸系の文物を積極的に取り入れていった集落であったとしても、それをにわかに弥生集落の典型例と断ずることには、やはり躊躇をおぼえるのである。ようするに、縄文時代の終末を、遠賀川式土器の出現と水稲耕作の開始といった少数の要素によって単純化してしまうことは、かならずしも歴史像を正確にとらえるとはいきれないことを、いいたいのである(註14)。そういう意味で、従来の列島西部における縄文時代の終末についての研究は、やや弥生時代前史としての立場に傾いていたことはいなめないと思う。一方で、これに説得力ある検証を加えることのできる資料の蓄積をみたのが、ここ20年ほどのことであることもまた、事実である。

本稿は、石棒を研究素材としたため、列島東部と列島西部東半との係わりを重視することとなった。しかし、大開遺跡に大陸系の文物が認められることは明白であるし、より縄文的要素の強い三谷遺跡でさえ、大陸系の文物が認められる。すなわち、列島西部西半の動向に、つねに目を向けておく姿勢もまた、継続すべきであろう。なぜなら、視点が列島の東西どちらかに偏ってしまえば、その研究が水掛け論に陥ってしまうことは、まぬがれないからである。本稿で、あえて有柄式磨製石剣をあわせた分布図(第5図)を作成したのもそのためである。

列島西部東半の縄文時代の終末は、われわれが考えているよりも、よほど複雑に諸文物が入り組んで混沌としたものであったと考えられる。これを解きほぐしていくことは決して容易ではないが、縄文系文物と大陸系ないし弥生系文物とのあいだに壁をもうけず、柔軟かつ偏りのない視点を持って列島全体を鳥瞰する姿勢を持ちつつ、縄文時代の終末という難題にとりくみたい。

(〒770-8503 徳島市蔵本町 2-50-1 徳島大学埋蔵文化財調査室)

註

- (1) 本稿では、あえて「東日本」・「西日本」という用語を使用せずに、「列島東部」・「列島西部」の用語を使用する。この区分は、あくまでも近畿地域以西を「列島西部」とする便宜的なものである。理由は、「東日本」・「西日本」という用語を使用することから無意識に生ずる先入観を、極力さけるためである。
- (2) 本稿では～地方ということばもさけて、～地域と表現する。なぜなら、こんにちの行政区画にとらわれてしまうことを、意識的にさけるためである。
- (3) とくに、秋山浩三は積極的に論を展開されている（秋山 2002ab・03・04ab）。氏の論考には論証の過程および結論に、一部受け入れることのできない点がある。しかし、このテーマが関心をよび、多くの先学・同学によって検討されることは、縄文時代の終末についての研究進展という意味において歓迎すべきことである。
- (4) この名称は後藤信祐による（後藤 1986ab）。また、筆者はかつて、大型石棒と刀剣形石製品を、同じ系譜から分化したという立場から、晩期後半の大型石棒盛行に関して、「一度小型化したものが再度大型化する」、と明記したことがある（中村豊 2001）。しかし、より正確には系譜を異にする両者が併存し、石棒の盛衰は、その消長であるというべきであろう。この点も、後藤がすでに示唆している（後藤 1999）。なお、第1表の分類についてもこれを反映させたつもりである。
- (5) 晩期後半にも、まれに刀剣形石製品が出土することがある。しかし、普遍的ではない点からみて、現時点でこれを過大評価すべきではない。
- (6) 石棒は、しばしば、弥生時代以降の諸遺跡からも出土することがある。たとえば、岡山県津山市大田十二社遺跡では、庄内式併行期（弥生時代終末期）の遺構から出土している（中山・安川ほか 1981）。近世の性器崇拜の対象、神社のご神体や寺宝として重宝されていることからみて、後の時代に再利用されることは多々あったものと考えられる。したがって、資料としてもちいるには注意が必要で、出土状況、型式や石材を十分にふまえるべきである。
- (7) 昨今の晩期土器の編年研究はめざましく、ここで説明した以上に細分が進んでいることは十分承知している。たとえば、突帯文土器と遠賀川式土器との併行期間が、それほど長くはならないという認識が定着しつつあるのは、成果の一つといえよう。しかし、石棒の出土状況との比較検討にもちいる場合、ここで使用する編年以上に分けることは難しいと思う。
- (8) 近年、晩期後半の列島西部における列島東部系土器の集成作業も進んでいる（小林 1999、中村健 1991、三好 1992 など）。また、高知県土佐市居徳遺跡では、大洞 A 式そのものが搬入されている（曾我・藤方 2002）。
- (9) 1999 年和歌山県文化財センター調査。報告書未刊。渋谷高秀氏のご好意により実見した。
- (10) ただし、池ノ谷遺跡を除く 3 遺跡は、晩期前半からの継続遺跡であって、出土石棒の多くはこの時期に属するとみられる点には注意を要する。
- (11) 池ノ谷遺跡出土の水銀朱が付着した石杵（奥 1995・99・2002）も、この交流の一端を担う資料と評価できる。
- (12) 大開遺跡のほかにも、高知県南国市田村遺跡（前田光・小島恵・吉成ほか 2004）、大阪府茨木市東奈良遺跡（茨木市立文化財資料館にて実見）、大阪府八尾市田井中遺跡（亀島 1999）、和歌山県御坊市堅田遺跡（川崎・久貝・池谷ほか 2002）などの弥生集落で石棒が出土している。
- (13) 研究に取り組むものが、特定の地域や学説の影響を受けることは、現実問題としてさげがたいと思う。しかし、これ乗り越えなければ、水掛け論の再生産が繰り返されることとなる。
- (14) もちろん、これをさらに推し進めた、突帯文土器とその併行期の列島を、一律に弥生時代早期と定義することも時期尚早であると思う。

引用・参考文献

- 秋山浩三 2002a 「弥生開始期以降における石棒類の意味」『環瀬戸内海の考古学－平井 勝氏追悼論文集－』
- 秋山浩三 2002b 「弥生の石棒」『日本考古学』第14号
- 秋山浩三 2003 「弥生に残る縄文の精神世界」『弥生創世記 検証・縄文から弥生へ』大阪府立弥生文化博物館
- 秋山浩三 2004a 「土偶・石棒の縄文・弥生移行期における消長と集団対応」『考古論集－河瀬正利先生退官記念論文集－』
- 秋山浩三 2004b 「縄文系呪術具の残存現象からみた弥生の始まり」『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館 2002年度共同研究成果報告書』財団法人大阪府文化財センター
- 浅岡俊夫・泉 拓良・野口哲也ほか 2000 『口酒井遺跡－第1次～第10次・第12次～第16次調査の概要－』兵庫県伊丹市教育委員会・六甲山麓遺跡調査会
- 泉 拓良 1985 「Ⅱ縄文時代」『図説発掘が語る日本史4 近畿編』新人物往来社
- 大下 明 1988 「第4章 第8節 2 石器・石製品について」『伊丹市口酒井遺跡－第11次発掘調査報告書－』兵庫県伊丹市教育委員会・財団法人古代学協会
- 奥 義次・御村精治 1988 『三重県度会郡度会町森添遺跡発掘調査概報Ⅱ』度会町文化財調査報告4 三重県度会郡度会町教育委員会
- 奥 義次 1995 「池ノ谷遺跡範囲確認調査報告」『三重県勢和村遺跡地図』三重県多気郡勢和村教育委員会
- 奥 義次 1999 「第2編勢和に刻まれた歴史 第1章勢和のあけぼの」『勢和村史 通史編』
- 奥 義次 2001 「第2編勢和村の考古遺跡－先史遺跡を中心として－ 第2章宮川支流濁川流域の遺跡 第4節丹生地区 2 池ノ谷遺跡」『勢和村史 資料編2』
- 勝浦康守 1990 『名東遺跡発掘調査概要』名東遺跡発掘調査委員会
- 勝浦康守ほか 1997 『三谷遺跡』徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会
- 亀島重則 1999 『田井中遺跡発掘調査概要Ⅶ』大阪府教育委員会
- 川崎雅史・久貝 健・池谷勝典ほか 2002 『堅田遺跡－弥生時代前期集落の調査－』和歌山県御坊市文化財調査会
- 桐原 健ほか 1973 「Ⅲ樋口五反田遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－上伊那郡辰野町その1－ 昭和47年度』長野県教育委員会
- 口野博史・井尻 格 1993 「戎町遺跡（第6次調査）」『平成2年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 栗林誠治ほか 2001 『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告18 大柿遺跡Ⅰ』財団法人徳島県埋蔵文化財センター調査報告書37 財団法人徳島県埋蔵文化財センター
- 後藤信祐 1986a 「縄文後晩期の刀剣形石製品の研究 上」『考古学研究』第33巻第3号
- 後藤信祐 1986b 「縄文後晩期の刀剣形石製品の研究 下」『考古学研究』第33巻第4号
- 後藤信祐 1999 「遺物研究 石棒・石剣・石刀」『縄文時代』10
- 小林青樹 1999 『縄文・弥生移行期の東日本系土器』平成10年度文部省科学研究費補助金特定領域研究A(1)『日本人および日本文化の起源に関する学際的研究』考古学資料集9
- 末永雅雄ほか 1961 『橿原』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告17 奈良県教育委員会
- 澄田正一・大参義一・岩野見司 1970 「第2章遺跡の立地・層位と出土遺物 2馬見塚遺跡」『新編一宮市史 資料編1』

- 曾我貴行・藤方正治 2002 『居徳遺跡群Ⅲ』高知県文化財団埋蔵文化財センター調査報告書 69 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 武末純一 1982 「有柄式石剣」『末廬国』六興出版
- 田中清美・家根祥多・山中一郎ほか 1982 『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』財団法人大阪市文化財協会
- 丹治康明 2000 「突帯文期の地域間交流」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
- 坪井清足 1962 「縄文文化論」『旧版岩波講座日本歴史 1 原始および古代 1』岩波書店
- 中井 均・中川和哉ほか 1986 『磯山城遺跡』米原町埋蔵文化財調査報告書 4 滋賀県坂田郡米原町教育委員会
- 中村健二 1991 「近畿地方における縄文晩期終末の土器」『第 1 回東日本埋蔵文化財研究会 東日本における稲作の受容』東日本埋蔵文化財研究会
- 中村 豊 1998 「稲作のはじまり－吉野川下流域を中心に－」『川と人間－吉野川流域史－』溪水社
- 中村 豊 2000 「東四国における弥生文化の成立」『第 47 回埋蔵文化財研究集会 弥生文化の成立－各地域における弥生文化成立期の具体像－』埋蔵文化財研究会
- 中村 豊 2001 「近畿・瀬戸内地域における石棒の終焉－縄文から弥生－」『縄文・弥生移行期の石製呪術具 3』平成 12 年度文部省科学研究費補助金特定領域研究 A (1)『日本人および日本文化の起源に関する学際的研究』考古学資料集 18
- 中山俊紀・安川豊史ほか 1981 『大田十二社遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告書 10 岡山県津山市教育委員会
- 新津 健ほか 1989 『金生遺跡Ⅱ(縄文時代編)』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 41 山梨県教育委員会
- 前田清彦・小島 隆ほか 1993 『麻生田大橋遺跡発掘調査報告書』愛知県豊川市教育委員会
- 前田光雄・小島恵子・吉成承三ほか 2004 『田村遺跡群Ⅱ』高知県文化財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書 85 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 前田佳久・内藤俊也ほか 1993 『神戸市兵庫区大開遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 松尾信裕・森 毅・山中一郎ほか 1983 『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅲ』財団法人大阪市文化財協会
- 南 博史・大下 明ほか 1988 『伊丹市口酒井遺跡－第 11 次発掘調査報告書－』兵庫県伊丹市教育委員会・財団法人古代学協会
- 三好孝一 1992 「西日本出土の浮線紋土器」『小阪遺跡』財団法人大阪文化財センター
- 安井俊則・石黒立人ほか 1991 『麻生田大橋遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 21 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 米田敏幸ほか 1981 『八尾南遺跡』八尾南遺跡調査会
- 渡辺 誠ほか 1975 『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』平安博物館

挿図出典

- 第 3 図 勝浦ほか 1997 より作成。
- 第 4 図 前田佳・内藤ほか 1993 より作成。
- 第 5 図 有柄式磨製石剣の分布に関しては、武末 1982 を参照。遺物は、石棒(勝浦ほか 1997)、有柄式磨製石剣(東かがわ市白鳥神社所蔵・筆者実測)。